

＜真柄昭宏氏＞

インタビュー： 渡邊健、野口昌克

【真柄昭宏氏のプロフィール】

著作：

『ツイッターを持った橋下徹は小泉純一郎を超える』（講談社）

経歴：

1984 年 一橋大学社会学部卒業

新自由クラブ政策スタッフ、自由民主党国会議員政策集団研究スタッフ、社団法人アジア フォーラム・ジャパン主任研究員を経て、

2001 年～ 竹中平蔵経済財政担当大臣政務秘書官、参議院議員竹中平蔵政策担当秘書

2005 年～ 自由党政務 調査会長特別秘書、自民党幹事長特別秘書を歴任。

現在、衆議院議員中川秀直政策担当秘書。

2011 年 千葉商科大学大学院で博士号(政策研究)取得

野口)本日議論させて頂きたいのは、1. 政治とソーシャルメディアのあり方 2. 政治におけるソーシャルメディアの効果・功罪 3. 政治における現状の利用状況・今後の課題といったところです。よろしくお願いします。

真柄)どこからいきましょうか(苦笑)。

ウォルター・リップマンは著書の『世論』で、人は真の環境にではなく頭の中に写っている環境のイメージ(疑似環境)に反応して行動すると指摘しました。「われわれには、これほど精妙で多種多様な組合せに満ちた対象を取り扱うだけの能力が備わっていない」ために「直接知ることができない」のです。だから、人々は物事を単純化して知りたがる。それに応えたのが小泉さんのワンフレーズ・ポリティクスだったんですよね。そのワンフレーズに対する批判が高まったので、それで安倍さんは丁寧に説明しようとしたら、マスコミに叩かれてしまった。物事を単純化して人々に説明できるのが、メディアが発達した民主主義社会のリーダーです。

ただし、最近のメディアに気になる風潮があります。2009年の政権交代の反省という名のもとに、物事を単純化して伝えるメディアの使命を放棄しようという風潮がある。私は、知り合いの記者にはそれはダメだと言っているんです。それをやってしまうと争点が見えなくなる。争点を明らかにしないといというのは、現状権力の追認なんですよ。

野口)そういう状況の中でソーシャルメディアというのはどういう位置付けになるんでしょうか。

真柄) みんなが参加することによって、結果として複雑な物事をそのまま議論できる可能性をもっているのがソーシャルメディアなのかもしれないと思います。もう一つ、熟議というのがありますが、これは時間をかけて議論して、その後一定の合意に至ったらそれをみんなで支えていきましょうというものです。ソーシャルメディアは複雑な物事について、そこで議論が交わされ、熟議に繋がっていくような可能性を持っていると思います。

話が少し逸れますが、橋下さんがツイッターを使い始めて面白いなと思ったのは、マスメディアが独占していた情報発信の壁を打ち破ったことですね。今までは新聞の原稿〆切が情報戦のサイクルをつくっていました。翌日朝刊の最終原稿は午前1時入稿。そこからは輪転機を回すから原稿が入れられない。次は夕刊の締切の正午前後の勝負になる。私が竹中大臣の政務秘書官のときにはそのサイクルで情報戦をやっていました。でも橋下さんは平気で明け方とかにツイッターでつぶやいていた。そうすると、新聞は朝刊と夕刊の1日2回のサイクルでは、とても対応できなくなった。それで、朝日新聞が橋下番というツイッターを作ったわけですね。橋下さんは自分の記者会見の内容について、逆にこの朝日新聞橋下番をリツイートしてあげた。これは橋下さんのツイッターが輪転機に勝った、っていうことなんじゃないかと思います。

橋下さんも最初は「ツイッターは鬱憤晴らし」だと言っていたわけですが、最近では結構みなさんからの意見に返信しているし、ツイッター上の具体的な提言を受け入れて行政のスタッフに検討を指示したりしている。私は橋下さんにお会いしたことがありませんので、ツイッター上での流れの読解しかしていませんが、ソーシャルメディアが熟議に繋がる可能性はあると思いますね。

野口) 我々は海外の事例との比較なんかもしているんですが、例えば大統領選挙を見ていて、政治におけるソーシャルメディアの効果をどうお考えになりますか。

真柄) オバマさんのソーシャルメディア活用で凄いと思う点がいくつかあります。例えば、カネ集めです。大統領やミシェル夫人本人から有権者本人にメールで献金のお願いが届いたりする。しかも演説のテレビ中継の直後に。それから、ボランティアの募集。ツイッターにでているアドレスをクリックしてボランティア募集のホームページにアクセスするとZipコード(郵便番号)や住所を入力するようになっていて、半自動的にその地域のボランティアにエントリーされるような。最近、『Obama2012』というFBページで、ログインする際に訪問者の個人情報、友達の個人情報まで提供することに同意するような仕組みになっているのを発見したんですよ。これは凄いですね。日本でいえば後援会名簿が瞬時にできてしまうようなものです。それから、米国ではブロガーの養成宿みたいなのをやるんですよ。参加したブロガーには一般の人よりも少し早目に情報を渡す。そうすると、ブロガーたちは喜んでそれを拡散するんです。

渡邊) 真柄さんはポピュリスト政権の実現についても触れられていますが、例えば直近の選挙では第三極が話題になっている中、結局、橋下さんが既存政党、言いにくいですけど、自民党のどなたかと組んでしまったら、第三極にはならないですよ。

真柄) 世論調査をみると、もはや民主党は二大政党の地位を失っているのではないのでしょうか。その意味で、民主党が第3極なのかもしれませんよ。また、今後の争点が何になるかも重要です。憲法改正が争点になれば、憲法改正賛成派と反対派の二極構造になるのでしょうか。その時点で第3極の役割を果たす勢力はいまわれているみなさんとは違うのではないのでしょうか。ソーシャルメディアで政治が動くとしたら、何か大きなドラマが起きる時だと思います。マスメディアが事実と異なる認識を形成しようとしているときに最も大きなドラマが起きるときだと思います。そのときに大事なものは、事実を伝える写真と動画です。文字情報は操作できますが、写真と動画は事実を伝えますから。日本ではあまりやりませんが、米国の動画をつかった批判合戦はユーモアがあって面白いですよ。例えば共和党がユーチューブでオバマを批判する広告映像(民主党政権と有権者との別れを男女の別れに準えているもの等)をアップしているんですが、プロの映像監督で面白いものを作っているように思います。あとは写真ですね。ソーシャルメディアということ言えば写真の使い方が重要だと思います。動画は数分時間が必要ですが写真は数秒で判断できます。写真のほうがより単純に人々にメッセージを伝えられます。オバマは家族の写真などをかなりのプロにきちんと撮らせているように見えます。これはオバマが専業主婦や家庭を重視しているというメッセージです。ロムニーも最近では少しずつ良くなってきているように思いますが、例えば、写真に写っている人たちの視線とか、オバマの写真はよく計算されていると思います。日本でもそういうところにお金をかけるべきですよ。

野口) 今後、政治にうまくソーシャルメディアを活用していくとしたら、どのようなことが考えられますか。

真柄) ソーシャルメディアでは、2割のまじめな情報発信と8割の生活感を伝えていくことだと思います。ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンは「信頼」について、農村社会では日頃の付き合いから「信頼」を醸成していった。それは「過去の経験」から将来を予想することだったわけです。一種の賭けですよ。それが工業化社会になり、日頃の付き合いが希薄になった。そうすると「信頼」のバックボーンなるものを日頃の付き合い以外に求めるようになったわけです。ルーマンは人格的信頼からシステムの信頼へとっていますが、日本でいえば、それが学歴とか上場企業に勤めていることが信頼のよりどころだったのだと思います。今そうした信頼が崩れはじめ、ソーシャルメディアは正にムラ社会的な「人格的信頼」に向かっているように思います。だから、写真や動画の情報が重要だし、日常の生活感が信頼できるかどうかの判断で重要なのだと思います。日常生活の在り方ほど、人の信頼のベースになるものはないと思います。また、FBで誰の知り合いだとかいうことも「信頼」につながっていると思います。

渡邊) その関連で言いますと、河野太郎先生にインタビューした際、ネット献金などというけれど、そもそもお金を渡すというのはよほどの知り合いにしかないわけで、政治家の事務所に行って直接

会話するといったことは、相当遠い世界の話だと感じている有権者が大半だという中で、そういった状況を変えていかないと、という話をお聴きしたんですが、その点はいかがですか。

真柄) まず、献金ということで言えば、目的を決めてファンドを募るということをするべきだと思います。収支も全て特定の目的の中で報告していくという公開性が大事だと思います。

渡邊) プロジェクトファイナンスの考え方ですね。

真柄) その通りです。それから、河野先生のおっしゃることはその通りなのですが、ソーシャルメディア、特に FB の中で人間関係が作られれば、リアルに知っている人と同じような親近感を持つてもらうことは可能だと思います。その結果ネット献金に繋がることも可能になっていくのではないのでしょうか。繰り返しになりますが、FB でも写真の使い方が重要だと思いますよ。映像よりも画像でしょう。映像は観るのに時間がかかりますから。日本人は画像に向いていると思うんですけどね。マンガが発達していますから。

渡邊) 江戸時代の浮世絵と似ていますね。

真柄) そうですね。日本のメディアが文章偏重になったのは明治以降ですからね。それまでは絵がメッセージの中心で文字はわき役。いまのFBと同じです。FBは日本の伝統的な情報伝達が復活するものといえるでしょう。

野口) 昔に戻ったということでしょうか。

渡邊) 日本の政治はずっとインテリに働きかける傾向が強かったように思います。だから文章で訴えかけようとしているのではないのでしょうか。米国の政治を見ていると、映像や画像で一般の人たちにいかに解りやすく伝えるかということに腐心していますよね。

真柄) 昔誰かに聞いた話なんですが、演説に数字をたくさん使うようになったのは竹下さんの頃だと。数字をいうとインテリに見えたからなんでしょうね。そのパラダイムシフトが 2007 年参院選前後。国家財政何兆円だ、何%という話から、月何万円という話に切り替えて勝利したのが民主党です。実感できる数字しかいわない。官僚に演説原稿を下書きしてもらおうとどうしても数字になってしまうんです。演説する人が記憶できない数字を、聴衆が覚えることはできません。一つの演説で伝わるメッセージは1つだけ。どんなに多くても3つです。自分の生活に関係ない数字なんて覚えられません。リーダーというのは、ある意味で見た瞬間なんです。パッと見てどうか。信頼できそうかどうか。それが人間に本能的にそなわっている生きて行くために必要な最も確かな情報分析能力です。これだけマニフェストがグチャグチャになってしまって、もう有権者は政治家の文章なんて信頼しない

でしょう。リーダーは個別のことよりもビジョンを示さなければならない。簡単な言葉で。それは国民の「じゃあ自分はどうすればいいの」ということに対する回答になりうるビジョンです。

渡邊）個々人に具体的な行動のヒントをくれるような政治家がリーダー足り得るということですね。会社経営と同じだと思います。

真柄）そうかもしれませんね。それで、それをツイッターでやろうとしているのが橋下さん。

野口）ある意味ヒトラーに似ている戦略かと。

真柄）ヒトラーの時代と今では情報コミュニケーション技術が違います。ヒトラーはラジオの時代の指導者です。今はツイッターやFBです。一方向から双方向性へ、そして映像を含めた共有と公開という点において異なります。だから、私も本の中で書いています。「ラジオのヒトラー、テレビの小泉、ツイッターの橋下」といっています。それから、FB を展開していることで注目しているのが安倍さんです。安倍さんのFBのタイトル写真-農道でお年寄りにお辞儀をしている-はとてもいい写真です。FBの使い方としては安倍さんが日本ではトップだと思います。

野口）最後に、政党と政治家個人のソーシャルメディアの活用方法の関連性についてもうかがいたいんですが。

真柄）政党には、ドイツ式のがちがちの組織政党なのか、アメリカ式の選挙のときだけお祭りのように盛り上がる政党なのかという違いがまずあります。情報コミュニケーション技術の中心が新聞だった時代は、組織政党は自党で新聞を作って宣伝したわけですよ。今でもその伝統を継承しているのが共産党の『赤旗』ですよ。しかし、今の情報コミュニケーション技術の中心はソーシャルメディアです。双方向、公開、共有の新しい技術です。これはドイツ式の組織政党よりも米国のように党でまとまるのは選挙の時だけで、選挙運動も草の根団体中心という政党方式に向いていると思います。

野口）自民党さんにインタビューした際、野党になってマスコミにも取り上げられなくなるだろうという危機感があつたと。逆に民主党さんは与党になったらあまり好き勝手言えないのだろう、ということをお聞きました。

真柄）野党になると自民党役職者のメッセージか、内紛ものしかマスコミに紹介されなくなります。そして、面白おかしく揶揄されることだけがゆがんだ形で取り上げられ、事実と異なる認識が形成されます。小泉政権の頃には反撃の手段がありませんでした。しかし今、ソーシャルメディアがあります。そしてソーシャルメディアを使っている多くの人たちがマスメディアが事実と異なる認識を形成する

ことに気づいてしまいました。橋下さんがツイッターをつかって、自分に対するネガティブな印象づくりをするマスコミのコメンテーターや記者に事実と異なることを指摘して、マスコミを凌駕した。橋下さんと同じことを今、ツイッターを持った数多くの人々がやりはじめました。時代は大きく変わろうとしています。

野口)ありがとうございました。